二〇一八年度　神奈川県公立高校入試問題

五〇分　一〇〇点

（注）解答欄にマス目（例：□□）がある場合は、句読点などもそれぞれ一字と数え、必ず一マスに一字ずつ書きなさい。なお、行の最後のマス目には、文字と句読点などを一緒に置かず、句読点などは次の行の最初のマス目に書き入れなさい。

一

次の問いに答えなさい。

(ア) 次の1～4の各文中の――線をつけた漢字の読み方を、ひらがなを使って現代かなづかいで書きなさい。

1　人生の<u>岐路</u>に立つ。

2　彼の<u>苦衷</u>を察する。

3　銀行から<u>融資</u>を受ける。

4　焦燥に<u>駆</u>られる。

1	2	3	4
			られる

(イ)　次のa～dの各文中の――線をつけたカタカナと同じ漢字を含むものを、あとの1～4の中から一つずつ選び、その番号を答えなさい。

a　服を作るためにヨウサイを習う。

1　弟子の非凡なサイカクを見抜く。
2　もめごとのチュウサイに入る。
3　庭のサイエンの手入れをする。
4　提出した企画がサイヨウされる。

b　姿勢を良くするためにハイキンを鍛える。

1　校舎はテッキンの三階建てである。
2　百貨店にキンムする。
3　今日の気温が例年のヘイキンを上回る。
4　寝不足はキンモツである。

c　友人とショウライの夢について語り合う。

1　雨で行事の進行にシショウを来す。
2　出場選手のショウシュウを行う。
3　野球部のシュショウを任される。
4　ろうそくのネンショウを観察する。

d　山頂で日の出をオガむ。

1　人事異動をハツレイする。
2　教科書のハイクを鑑賞する。
3　学校のチョウレイで話を聞く。
4　知恵をハイシャクする。

(ウ)　次の例文中の――線をつけた「られる」と同じ意味で用いられている「られる」を含む文を、あとの1～4の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

例文　待ち時間が長く感じられる。

1　空梅雨で水不足が案じられる。
2　観光客から道を尋ねられる。
3　好き嫌いなく食べられる。
4　社長が出張先から戻って来られる。

(エ)　次の短歌を説明したものとして最も適するものを、あとの1～4の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

夏のうしろ、夕日のうしろ、悲しみのうしろにきっ(ッ)と天使ゐ(イ)るらむ(ン)　栗木京子(くりききょうこ)

1　夏が終わりゆくときの何かをやり残した感覚、夕日が沈んだ後の言葉にできない不安、急に訪れる悲しみを救ってくれるのは「天使」だけだという確信を、「きっと」を用いて表現している。
2　夏の後には秋が、夕日が沈んだ後には夜が来て、悲しみの後には喜びがやってくるというごく自然な日常のありさまを、「夕日」「うしろ」「ゐる」のようにイとウの音を多用して軽快に表現している。
3　夏の終わりの寂しさ、夕日の切なさ、何か悲しみを感じたときに、自分には見えなくても見守り支えてくれるものが存在するという思いを、同じ語の繰り返しと読点を効果的に用いて表現している。
4　夏の終わりや夕日が沈むときに誰もが感じた悲しみは、「天使」がいるとしてもきっと消えはしないという過去にとらわれている思いを、下の句に歴史的かなづかいを用いて表現している。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

（注）六波羅（ろくはら）の太政入道（だいじやうにふだう）、（注）福原（ふくはら）の京（みやこ）たてて、みなわたりゐて後、ことのほかにほどへて（思いのほか時間がたってから）、「古京と新京といづれか勝れるといひさだめをせむ（議論をしよう）。」とて、古京に残り居たるさもある人ども、みな呼びくだしけるに、人みな入道の心をおそれて、1思んばかりも言ひひらかざりけり。（注）長方卿（ながかたきやう）ひとり少しも所をおかず（遠慮しないで）、この京をそしりて、言葉も惜しまずさんざんに言ひけり。さて、もとの京のよきやうを言ひて、つゐにその日のこと、かの人のさだめによりて、古京へ帰るべき儀になりにけり。

後にその座にありける（注）上達部（かんだちめ）の、長方卿に会ひて、「2さてもあさましかりしことかな。さばかりの悪人の（あれほどの非情な人が）、いみじと思ひてたてたる京を、さほどにはいかに言はれしぞ。言ひ趣（い・おもむ）けて（説得して）帰京の儀あればこそあれ、いふかひなく腹立ちなば、いかがしたまはまし。」と言ひければ、「このこと、我が思ひには似ざる儀なり（私の考えとは違うのです）。入道の心にかなはんとてこそさは言ひしか。その故は、広く漢家本朝を考ふるに（広く中国や日本の例を探ってみますと）、よからぬ新儀行ひたる者、はじめに思ひたつ折は、なかなか人に言ひあはすることなし（相談することはありません）。そのしわざ少し悔（くや）しむ心あるとき、人には問ふなり。これもかの京、ことのほかに居つきて後、両京のさだめを行ひしかば、はや、このこと悔しうなりにけり、といふことを知りにき。されば、3なじかは言葉を惜しむべき。」とぞ言はれける。

まことにも、後に人に超えられんとしけるときも（他人に地位を追いこされそうになったときも）、この入道よきやうに申して、「長方卿は、ことのほかにものおぼえたる人なり。たやすく人に超越せしむべからず。」とて、後までも方人（かたうど）（味方）をせられけるなり。

（「続古事談（ぞくこじだん）」より）

（注）六波羅の太政入道＝平清盛（一一一八～一一八一）。京都の六波羅に邸宅があった。
福原＝現在の兵庫県神戸市の地名。一一八〇年、平清盛が一時都を移した。
長方卿＝藤原長方（一一三九～一一九一）。
上達部＝貴族の中でも高い位の者。

(ア) ――線1「思んばかりも言ひひらかざりけり。」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「新京」に移った人たちは、「入道」の高い地位におそれをなして、「新京」に対する自分の思いを正直に告白することができなかったということ。

2 「新京」に移った人たちは、「入道」の脅しの言葉をおそれて、以前のように「古京」に戻って生活をしたいという願いを口にしなかったということ。

3 「古京」に残っていた人たちは、「入道」の怒りを買うのをおそれて、「古京」と「新京」に対する自分の考えをありのままに打ち明けなかったということ。

4 「古京」に残っていた人たちは、「入道」の力強い雰囲気におそれをなして、都を移した後も「古京」に残っていた理由について弁解をしなかったということ。

(イ)　――線2「さてもあさましかりしことかな。」とあるが、それは誰がどのように発言したことに対して「上達部」が言ったことか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　「入道」が「新京」の不備を認めつつ、「古京」に残った人々に早く移転するよう説いたこと。
2　「長方」が「新京」のよさを述べつつ、「古京」へのこだわりを捨てるべきだと訴えたこと。
3　「入道」が「新京」に移った人々を賞賛するとともに、「古京」に残った人々を責めたこと。
4　「長方」が「新京」について非難するとともに、「古京」のよいところを述べたこと。

(ウ)　――線3「なじかは言葉を惜しむべき。」とあるが、「長方」がそのように言った理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　「入道」が「新京」に都を移したことを少し悔やんでいると察し、はっきりと意見を述べることで「入道」の気持ちに応えようとしたから。
2　「入道」が「新京」に都を移したことについていくらか後悔していることに気付き、人前で指摘して「入道」に恥をかかせようとしたから。
3　自分が「入道」に進言しなかったことで「古京」に戻るのが多少遅れて世の中を混乱させたと反省し、「入道」に謝罪しようと考えたから。
4　自分の進言が「入道」に受け入れられず一度は「古京」に帰されてしまったが、それでも「入道」に自分の真意を伝えようと思ったから。

(エ)　本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　「入道」は、「新京」に都を移したことの是非について、議論の場を設けて人々に意見を求めたが、「長方」に遠慮して誰も意見を述べることができなかった。

2　「入道」は、「古京」と「新京」に関する議論をした後、「長方」のことを気にかけ、他の者が「長方」の地位を簡単に追いこすのを許そうとはしなかった。

3　「長方」は、他の者がうらやむほど知識が豊富であり、「入道」から的確な意見を期待され、都の移転後に「古京」と「新京」に対する見解を求められた。

4　「長方」は、「古京」と「新京」の優劣の議論をめぐり「入道」を怒らせたが、最後まで味方をしてくれる人のおかげで、もとの地位を維持することができた。

□

三　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

> 富岡(とみおか)製糸場で働くことになった「横田英(よこたえい)」は、富岡に出発する前日に、実家で働く「幸次郎(こうじろう)」から手紙を渡された。約三か月後、「英」は、父「数馬(かずま)」の製糸場視察に同行した「幸次郎」と再会した。

幸次郎の中では、三つの時間が繋(つな)がっていた。夕陽(ゆうひ)の中で手紙を渡した時間と、(注)松代(まつしろ)から送り出した時間と、そして今だ。だから幸次郎は、英が松代を去るまでの二日間にかすかに感じた心の繋がりを手繰ったまま、声をかけたのだ。

だが英にとって、あの二日間と今は遠く離れている。その間にいろいろなものが挟まっているせいだ。何度も手紙を読みたいと思い、そこに書かれた言葉に期待を膨らませた。だが、そこには英が求めていたような言葉はなかった。失望しないために「幸次郎なんか好きじゃなかった。」と思った。そしてずっと、仕事をしてきた。たくさんのことを覚え、たくさんの人に出会った。フランス人は好きな人と腕を組んで歩くことも知った。

そうだ、相手が好きなら、それを相手にも示し、そして周りにも示しながら堂々と歩くのだと英は知った。それを思うと、「お変わりなく。」という手紙はあまりに味気ない。

幸次郎は「お入りください。」と言って、自分は縁側に下がった。英は部屋に入って座った。縁側と畳の上。それが、二人が生まれた境遇の距離だ。

幸次郎はじっと英を見ている。座った以上は、英も何か話さなければいけない。でも、何を?

英は、あの手紙——紙の真ん中だけにしか文字がない手紙——を読んだときに感じた失望にこだわっていた。幸次郎を直接見ずに、畳に落ちた影を見つめる。a蟻(あり)が這(は)ってきて、幸次郎の影の中に消える。

「お嬢様。お元気そうで何よりです。」

幸次郎が言った。

「元気です。毎日働いています。」

英の声には険があった。幸次郎は敏感にそれを感じた。富岡行きに加えてもらえると知った瞬間からずっと膨らみ続けていた気持ちが、あっという間にしぼむ。二人とも、次の言葉が見つからない。b 蟻が、幸次郎の影から抜け出して、更に先に進んでいく。

それを見てから英は言った。

「幸次郎、わたしは恥ずかしい。どうしてあんな恰好（かっこう）で来たの?」

「何のことでしょう。」

「1 洋装よ。まるで似合ってない。」

「……製糸場に行くなら洋装が良かろうと、数馬様に貸して頂いたのです。」

「でも、その頭だもの、おかしい。」

「申し訳ありません。」

「わたしは富岡で、松代の名を背負って仕事をしているのです。何か失敗してはみんなに迷惑がかかると思って気が気ではないの。でも、何とかやっている。(注)皇太后様と皇后様までご視察にいらしたの。わたしがやっているのはそういう仕事なの。なのに、幸次郎があんな恰好で来たら、松代が田舎だと思われてしまう。」

「申し訳ありません。」

幸次郎の声は、どんどん小さくなってゆく。

「幸次郎には、幸次郎には……もっとかっこよくいて欲しかった。」

英は口に出して、急に恥ずかしくなった。これが本音なのかもしれない。

松代には松代の秩序があった。父は優しく、そして偉い。会うと心がときめくのは幸次郎。不愉快にさせられるけど、結局何もかも話してしまうのは(注)晶子。厳しさに緊張するが、同時に困ったときに顔を見れば安心するのが母。

山に囲まれたあの町で、英の世界は簡単で純粋だった。

だが、ここに来て英の世界も変わった。

「わたしは、ここでいろいろと学びました。これからも一日一日、もっと新しいことを学びたいと思っています。なのに、幸次郎は前と同じ。洋装も着こなせないし、まだ髷(注)も切っていない。そんな幸次郎は……。」

英は、自分の言葉をどこに着地させればいいか見失った。そして、一番言ってはいけないことを口に出した。

「そんな幸次郎は、嫌い。」

幸次郎は、何も感じていないという顔でその言葉を受け止めた。幸次郎の呼吸は乱れることもなく、その胸が静かに動いている。

幸次郎には、自分だって別れの日から今まで、大きな変化はなくても真面目に日々を送って来たのに、という反論があった。でも、それを口に出すのは止めて、幸次郎は自分で話を終わらせた。

「2何も変わっていない。……そうですね……そうでしょう。」

幸次郎は、そのとき胸から沸き起こって来た感情を息と一緒に飲み込んで、頭を下げてその場を去った。

あれ以来、おかしなことがあっても、笑う腰が重い。あの出来事が胸の真ん中に居座って、心が浮き立つのを邪魔している。

英が初めて尾高勇と会ったのは、そんなときだった。勇は、尾高惇忠の娘である。製糸場の最初の工女募集に応募者が無く、「血を取られる。」という噂が立ったため、惇忠が安全を証明しようと十四歳の自分の娘を呼び寄せたのだった。勇は第一号の工女となり、その後、懸命に技術を学び、二十二人しかいない一等工女になっていた。

休憩の時間だった。みんな支給されたゴマ付きのおにぎりを持って、腰を下ろすところを探していた。英はその日、隣の釜(注)にいた新子(注)と一緒だった。新子は最近やっと糸繰りをさせてもらえるようになって、英にずっと質問している。

「新子ちゃん、自分の師匠に聞きなさいよ。」

「でも、あの人意地悪なの。わたしが何か聞いても、『考えるより体で覚える方が早いです。』って、ちゃんと教えてくれないのよ。」

英は、新子に『考えるな。』と言った師匠は、考えすぎる新子のことをよくわかっていると思ったが、そこは言わずにおく。

日陰を求めて歩いていた英と新子は、一人で座り、風に吹かれている勇を見つけた。英がただ憧れで見つめる中、新子は「お声をかけなくては。」と呟いた。英が止める間もなく、新子は勇に近寄ってゆく。

「勇様。」

勇が顔を向ける。横から吹く風のせいで髪が目にかかり、勇は目を細めた。

「前に一度ご挨拶申し上げた者です。松代の。」

「新子さんですね。」

大人びた雰囲気に似合わず、声は子供のように疑いのない明るさを持っている。

勇が憶(おぼ)えていたので、新子は強気になった。

「ご紹介させて下さい。同郷の横田英さんです。」

英は慌てて頭を下げた。

「こちらの英さんも勇様と同じなのです。」

英は、何を言い出すのかと驚いて、新子の顔を見た。新子は秘密を打ち明けるかのように神妙な顔だ。

「勇様は、工女募集のお達しに皆が応募しないので、お父様を助けるために工女になられたと伺っております。英さんも同じなのです。英さんのお父様は、松代で工女募集のお仕事をなさっていました。でも、誰も名乗り出ません。お父様が困っておられるのを見かねて、英さんが勇気を出して『わたしが行きます。』とおっしゃったのです。」

英はいたたまれない気持ちになった。自分が志願したのは、いわば成り行きだ。勇様と同じなんておこがましい。

「お父様思いですね。」

勇に言われ、英はその賛辞をそっと押し返す。

「あのときはただ、『行きます。』と言っただけでした。仕事のことなどわかっておりませんでした。」

「本当に、仕事は難しいですね。」

勇は、風に飛ばされそうな声で呟く。英は頷(うなず)いて続けた。仕事の話なら、いくらでも言葉が出てくる。

「わたくしも毎日そう思っております。(注)揚返(あげかえし)のときは、どうすれば糸が切れないようにできるかとそればかり考えて。今は糸繰りをやらせて頂いておりますが、器械を止めずに、一日にもっとたくさん糸を繰れないものかと考えています。」

「糸のことではなくて。」

勇は優しく否定した。

「仕事をする中で何か覚えると、つい自分が偉くなったような気がしてしまいます。でも、わたしは糸を繰っているだけのこと。この製糸場を造るのにどれだけの方が骨を折られたか、故郷に残った人たちがどんなに心配して下さっているかを忘れてしまうなんて……。仕事とは難しいものだといつも思います。」

3 勇の声は細いのに、言葉は途切れることなく繋がっていた。そして、いい糸のような、他を寄せ付けない強さを持っている。

「毎日働いて、仕事はもっと上達しても、それとは別に、わたしが本当に立派になるためには何をすればいいのでしょう？　考えてはおりますが、なかなか答えが出ないのです。」

英は顔が赤くなって、同時に胸の真ん中がどんどん冷たくなるのを感じた。

勇の話が終わったとき、まだ休憩時間は残っていた。英は、急ぎ足で寄宿舎の裏に向かった。

井戸の辺りは避ける。誰か来るかもしれないからだ。泣くところを見られたくない。涙がこぼれるより、一瞬だけ足の方が速かった。

4 英は、松代を発(た)って初めて泣いた。

自分は傲慢だったと思った。いろいろなことを知ったつもりで、松代にいた頃とは違う人間になった気がして誇らしかった。だから幸次郎を「変わっていない。」と責めた。

だが、仕事を覚えて、フランス人と会って、洋装の人たちに囲まれたからと言って、自分は自分だ。

お変わりなく。

あの言葉には、富岡でいろんなことと出会うはずの英を気遣う、幸次郎の想(おも)いがこもっていた。あれは、「お元気で。」というだけではなく、「新しいことを求められて戸惑っても、あなたなら大丈夫ですよ。」とか、「ここでの生活を忘れないで下さいね。」とか、いろいろな意味だったのだろう。英が実家への手紙にすべてを書き切れなかったように、幸次郎も、書き切れなくてああ書くしかなかったのだ。紙の

真ん中にしか文字が無い手紙だったのではない。あの空白に書き切れない想いが詰まった手紙だったのだ。

（藤井清美（ふじいきよみ）「明治ガールズ」より。一部表記を改めたところがある。）

（注）　松代＝長野県北部の地名。「英」の故郷。
　皇太后＝天皇の母。
　晶子＝「英」の友人。
　髷＝髪を束ねて結ったもの。
　釜＝糸をほぐすために繭を煮る釜。
　新子＝「英」と同郷の少女。
　揚返＝小さい枠に巻き取られた生糸を、大きい枠に巻き直す作業。

(ア)　――線1「洋装よ。まるで似合ってない。」とあるが、そのときの「英」の気持ちを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　仕事に打ち込むことで「幸次郎」への恋心を忘れていたが、再会して思わず動揺し、強い言葉を投げかけて「幸次郎」への思いを再び断ち切ろうとしている。
2　自分の仕事は皇族が視察にくるほど先進的なものだが、田舎で父を手伝う「幸次郎」の仕事は何の進歩もないと思い、その地味な生き方を見下している。
3　髷を切らないままの洋装で現れた「幸次郎」の感覚を信じられないと感じながら、自分まで仲間たちから笑われてしまった屈辱に耐えられないでいる。
4　自分の好意を素直に表すわけにはいかず、「幸次郎」の洋装にかこつけて、自分が求めていた言葉が手紙になかったことへの不満をぶつけようとしている。

(イ)　――線2「何も変わっていない。……そうですね……そうでしょう。」とあるが、ここでの「幸次郎」の気持ちをふまえて、この部分を朗読するとき、どのように読むのがよいか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　「数馬」の勧めで洋服を着て、晴れがましく思っていたのに、「英」から内面が変わっていないと言われ、この場から消えたいという思いをやっと吐き出すように、少しずつ声を弱めながら読む。

2　「英」にあてた短い手紙のなかに自分なりの精一杯の好意を込めたものの、「英」からはっきりと拒絶されてしまったため、落ち込んだ気持ちを悟られないように、抑揚をおさえながら読む。

3　自分の変化したことばかり述べて「幸次郎」を否定する「英」の言葉を受け止め、たとえ変化はなくても、自分なりに真面目に生きてきたという思いを抑え込むように、間を置きながら読む。

4　自分の誇りを傷つけるだけでなく、松代の生活までも否定する「英」の発言に怒りを感じつつも、自分の置かれた立場をわきまえてその気持ちを必死にこらえるように、余韻を残しながら読む。

□

(ウ)　――線3「勇の声は細いのに、言葉は途切れることなく繋がっていた。そして、いい糸のような、他を寄せ付けない強さを持っている。」とあるが、「勇」の言葉から読み取れるその人物像として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　大人びた雰囲気と子供のような明るさを備えており、一等工女に選ばれたことによって周りの人たちに対する優越感を持っている人物。

2　自分の考えをしっかりと述べる芯の強さがあり、仕事に謙虚に向き合って工場が造られた背景や故郷の人々を思いやることができる人物。

3　第一号の工女として必然的に皆を先導する役割を果たしており、故郷や工場の人々からの評価を気にして周りの様子を観察している人物。

4　自分の考えと違うことを言われると反論せずにはいられない性格であり、仕事で卓越した技術を持っていることを誇りにしている人物。

(エ)　――線4「英は、松代を発って初めて泣いた。」とあるが、その理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　「勇」の言葉を聞いているうちに、自分がいろいろなことを知ったつもりで思い上がり、「幸次郎」の気持ちを考えずにひどい言葉をかけてしまったことに気付いたから。
2　本当に立派になるために何をしたらいいのかという答えの出ない問いについてこれまで考えたことがなく、「勇」には何をしてもかなわないと思い、自尊心が傷つけられたから。
3　仕事を覚えて自分が違う人間になった気がして誇らしかったが、「勇」の言葉によって仕事を進めるうえで知らない作業が多いことに気付き、自分の未熟さを反省したから。
4　「勇」の言葉によって、両親や「幸次郎」など故郷で自分の帰りを待ちわびている人たちのことを思い浮かべ、可能であれば今すぐ帰りたいほど故郷が恋しくなったから。

□

(オ)　〰〰線a「蟻が這ってきて、幸次郎の影の中に消える。」、〰〰線b「蟻が、幸次郎の影から抜け出して、更に先に進んでいく。」とあるが、それらの表現がもつ効果について説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　「幸次郎」への失望にこだわり「英」が言葉を発せずにいる状況から、「英」の気持ちを察して「幸次郎」も言葉を失い、二人の心の隔たりが表面化していくまでの時間の経過を表している。

2　多くの経験を通じて変化を自覚した「英」と、松代で変化のない生活をしていたために「英」の気持ちについていけなくなった「幸次郎」との間で分かれた人生の明暗を表している。

3　「英」が、何も変わらずにいる「幸次郎」との再会を通じて、「幸次郎」との間の埋められない心の距離を確認し、現状から抜け出して新しい世界へ進もうと決意する瞬間を表している。

4　「幸次郎」への失望を打ち消そうとする「英」の葛藤と、その「英」の気持ちを短いやりとりの中に感じ取った「幸次郎」が、自分から身を引こうと思いを固めるまでの過程を表している。

□

(カ)　この文章について述べたものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　明治時代の先進的な製糸場である富岡を舞台にして、「英」や「幸次郎」をはじめ、当時の若者にも輝かしい青春があったということを、複数の人物の証言を交えて重層的に表現している。

2　明治時代における製糸業が、「英」をはじめとする工女にとって大変つらい仕事であったということを、皇族の視察の逸話や「揚返」、「糸繰り」などの専門用語を用いて詳細に表現している。

3　松代を出発したばかりの頃は仕事のことなどまるで理解していなかった「英」が、「幸次郎」や「勇」に支えられて一等工女に成長していく姿を、「幸次郎」の視点から感動的に表現している。

4　新しいことを学びながらも謙虚さを失っていた「英」が、「勇」との交流をきっかけに、「幸次郎」の手紙に詰まった様々な想いに気付くまでの過程を、丁寧な描写により生き生きと表現している。

□

四　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

哲学（philosophy）の語源は、philia（愛）とsophia（知）。古代においては、知を愛し探究することは、なんでも哲学とされていた。だから、今なら「自然科学者」と呼ばれる人たちもまた、当時は「自然哲学者」と呼ばれていたのだ。

彼ら自然哲学者たちは、満足な実験道具も技術も持っていなかった。だから、もっぱら〝考える〟ことに頼って世界の謎に取り組んだ。

今の科学から見れば、それはほとんど子どもだましみたいなものだ。だからその観点からいえば、古代の自然哲学は、たしかに科学に取って代わられたといえるかもしれない。

いや、むしろ、1<u>自然哲学は自然科学へと〝進化〟したのだというべきだろう。</u>宗教が哲学のお母さんだったように、哲学もまた、その思考や方法（観察・実験など）の進展に伴って、近代の科学を生み出すことになったのだ。

でもその一方で、哲学は科学とは別の方向にも自らを進化させてきた。

その生みの親こそ、タレス（注）ら自然哲学者たちから一世紀あまり後に登場した、西洋哲学の父ソクラテス（とその弟子プラトン）だった。

ソクラテスはこんなことを考えた。

哲学が真に考えるべき問題、それは、自然哲学が問うているような〝自然〟や〝世界〟についてじゃない。［A］、この世界を問うているわたしたち〝人間〟自身である！

古代ギリシアのアポロン神殿には、「汝（なんじ）自らを知れ」という格言が刻まれていた。ソクラテスは、まさにこれこそ、哲学が探究すべき根本テーマだといったのだ。

〝外〟から〝内〟へと目を向けること。これはある意味では、人間の精神が幼年期から青年期へと成長したことのあらわれだったともいえる。

赤ちゃんや子どもは、いつでも〝外〟の世界に興味津々（きょうみしんしん）だ。虫や葉っぱや土なんかをさわって、おおげさにいえば、世界がどうなっているのかを知ろうとする。

でも、思春期をむかえるころから、僕たちはだんだんと自分自身に目を向けるようになる。「どんな人生を生きるべきだろう？」「自分

には何が向いているんだろう?」「幸せってなんだろう?」そんなことを考えるようになる。

2 自然哲学からソクラテス哲学への展開もまた、おそらくはそれと同じような出来事だったのだ。

ちなみに、ソクラテスが生きたのと同じ紀元前五世紀頃、中国には(注)孔子(こうし)が、インドには(注)仏陀(ぶっだ)が登場している。彼らもまた、「人間とは何か?」「人生はどう生きるべきか?」といった、まさに〝人間〟について考えた人たちだった。

同じ時代、同じような問いを考えた人たちが、不思議なことにまったく異なる文明に現れた。

今から二五〇〇年前、人類は突如として3 知の大革命を経験したのだ。

ソクラテスの考えを、哲学と科学の関係という観点から、僕なりに大胆にいい直してみたい。

科学が明らかにするのは、いわば「事実の世界」のメカニズムだ。それはたとえば、物を手放せば落ちるとか、(注)DNAは二重らせん構造をなしているとか、人は恋をしているとき、脳が活性化しているとか、(注)フェニルエチルアミンやドーパミンが分泌されているとかいった、文字通り「事実」の世界だ。

それに対して、哲学が探究すべきテーマは、〝真〟〝善〟〝美〟をはじめとする、人間的な「意味の世界」の本質だ。

「〝ほんとう〟のことってなんだろう?」「〝よい〟ってなんだろう?」「〝美しい〟ってなんだろう?」そして、「人生いかに生くべきか?」

こうした意味や価値の本質こそ、哲学が解き明かすべき問いなのだ。

僕たちは、4 科学が対象とする「事実の世界」だけじゃなく、豊かな「意味の世界」もまた同時に生きている。恋をしたときの僕たちは、フェニルエチルアミンがどうというより、その味わい深い恋の「意味の世界」をこそ生きる。

哲学者の西研(にしけん)(一九五七―)がいうように、科学は、恋をしている人の脳からどんな化学物質が出ているかを明らかにすることはできる。でも、僕たちにとって恋とはいったい何なのか、その〝意味〟の本質については、ほとんど何も教えてはくれない(『哲学的思考』)。

それを明らかにするのは、哲学の仕事なのだ。

さらにいえば、哲学が探究する「意味の世界」は、実は科学が探究する「事実の世界」に原理的に先立つものだ。

え? どういうこと?

と、多くの人は疑問に思うんじゃないかと思う。

僕たちの多くは、ふだん、世界は科学的な法則に支配されていると思い込んでいる。天体法則とか人体のメカニズムとか、脳の働きとかＤＮＡの仕組みとか、そういった〝事実〟こそが先にあるのであって、〝意味〟は、そうした事実に人間があとからくっつけたものだと考えている。

でも、５事態はまるっきり逆なのだ。

というのも、いわゆる〝事実〟は、僕たちの「意味の世界」のアンテナにひっかからないかぎり、決して〝事実〟として認識されることがないからだ。

[Ｂ]、天体法則という〝事実〟が存在するのは、僕たちがこの法則に〝意味〟を見出（みいだ）しているからだ。

太古の昔から、人類は農耕を行うためにそのメカニズムを知る必要があった。あるいはその〝美〟に魅せられて、天体を観察しつづけてきた。

同じように、人体のメカニズムを僕たちが知っているのは、それが僕たちにとって意味あるものであるからだ。健康や長寿に〝意味〟を見出しているからこそ、人類はその謎に挑みつづけてきたのだ。

もしも僕たちが、こうした〝意味〟のアンテナを持っていなかったなら、天体法則や人体メカニズムといった〝事実〟は、僕たちにとって存在することさえなかっただろう。

いやいや、それはそうかもしれないけど……と、まだ腑（ふ）に落ちない方も多いだろう。

たしかに、〝事実〟は僕たちの〝意味〟のアンテナにとらえられないかぎり、僕たちにとって存在しないのかもしれない。でも、たとえそうだったとしても、天体法則はやっぱり客観的に存在するし、ＤＮＡは太古の昔から二重らせん構造をなしていたんじゃないの？　つまり、科学的な事実は、人間がいようがいまいが、やっぱり客観的な事実といえるんじゃないの？　そう思う人もいるだろう。

でもそれは本当だろうか？

極端な話をすれば、もしも人類よりはるかに知能が進んだ宇宙人がいたとしたら、彼らの住む「事実の世界」は、僕たちの世界とは大きく異なっているだろう。三次元や四次元どころか、彼らは二〇次元くらいの世界に生きているかもしれない。その世界では、ＤＮＡは二重らせん構造をなしていないかもしれないし、時間だって存在していないかもしれない。

いや、そんなとっぴな例を持ち出さなくても、もっと身近なカラスは、人間には認識できない紫外線を認識できるという。だから、どうやらお互いを黒色とは認識していないらしい。

要するに、カラスは、僕たちにとっての「事実の世界」と、いくらか異なった世界を生きているのだ。

それはつまり、６僕たちもまた、「僕たちにとっての事実の世界」をしか生きられないということだ。

（苫野一徳（とまのいっとく）「はじめての哲学的思考」より。一部表記を改めたところがある。）

（注）タレス＝紀元前六世紀頃の古代ギリシアの哲学者。
孔子＝儒教の開祖。
仏陀＝仏教の開祖。
DNA＝遺伝子の本体。
フェニルエチルアミンやドーパミン＝脳内で分泌される物質。

(ア)　本文中の［A］・［B］に入れる語の組み合わせとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　A　あるいは　B　または
2　A　しかし　B　もちろん
3　A　また　B　たしかに
4　A　むしろ　B　たとえば

□

(イ) ――線1「自然哲学は自然科学へと〝進化〟したのだというべきだろう。」とあるが、そのように言える理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 自然哲学から派生した自然科学が共通の尺度を作ったことにより、人々の思考が整理されたから。
2 考えることに頼っていた自然哲学の思考や方法の進展により、近代の科学が生み出されたから。
3 自然哲学の進展により、宗教で扱われていた世界の謎が自然科学の領域として整理されたから。
4 思考の進展により、異なる領域を扱う自然哲学と近代の科学が新たな学問分野に統合されたから。

(ウ) ――線2「自然哲学からソクラテス哲学への展開」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 人間が思春期をむかえて外の世界に目を向けるように、自然哲学が学問的に進展していくなかでソクラテス哲学の原点に立ち帰るようになったこと。
2 「人間とは何か？」と問いかけていた段階から、科学の基盤となる観察や実験を行うことにより、この世界がどうなっているかを知るようになったこと。
3 人間の精神が幼年期から青年期へと成長するときに、仲間とのかかわりよりも一人の時間を大切にして、自分自身の生き方を模索するようになったこと。
4 自然や世界がどうなっているかを探究する段階から、人間の内面に目を向けて、「どんな人生を生きるべきだろう？」などと考えるようになったこと。

(エ)　――線3「知の大革命」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　自然哲学が発展したのと同じ時期に、人類が人間自身の根源的な問いについて考えるようになり、文明を越えて交流しはじめたこと。

2　ソクラテスが哲学で探究すべきテーマを人間自身としたのと同じ時期に、世界各所で人間について考えようとする人たちが現れたこと。

3　自然科学が発展したのと同じ時期に、自然哲学も研究が進んで観察や実験で得た客観的な数値に基づいて思考を深めるようになったこと。

4　中国の孔子などが思想を広めたのと同じ時期に、ソクラテスが人間の本質について考えたことで、それまでの自然哲学が否定されたこと。

(オ)　――線4「科学が対象とする『事実の世界』だけじゃなく、豊かな『意味の世界』もまた同時に生きている。」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　人間は、世界の仕組みを明らかにすることよりも、物事の意味や価値を追究することが、人生をさらに充実させるために必要であると信じて生きているということ。

2　人間は、哲学で探究する世界を心の支えにしつつも、科学の力で世の中を進歩させていくことが、物質的な面で人生を豊かにすると思って生きているということ。

3　人間は、科学が明らかにする仕組みや法則の世界にあるとともに、人間や人間にかかわるものについて考え、その意味や価値を見出しながら生きているということ。

4　人間は、物事の仕組みを調べるだけでなく、人生の価値や本質を哲学を通して追究することによって、科学的な法則の支配から逃れるように生きているということ。

(カ)　――線5「事態はまるっきり逆なのだ。」とあるが、それを説明した次の文中の Ⅰ ・ Ⅱ に入れる語句として最も適するものを、これよりあとの本文中から**それぞれ六字**で抜き出し、そのまま書きなさい。

事実は Ⅰ するものではなく、人間が対象を Ⅱ としてとらえて初めて、事実として認識されるということ。

Ⅰ □□□□□□
Ⅱ □□□□□□

(キ)　――線6「僕たちもまた、『僕たちにとっての事実の世界』をしか生きられない」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　「事実の世界」はそれを認識しているものの数だけ存在しており、それぞれ認識の仕方が異なるなかで、人間は人間の認識の仕方で事実をとらえているということ。
2　「事実の世界」は人間が科学的に解明した通りの姿をしており、生物によって認識の仕方はそれぞれ異なっていても、共通する一つの世界の中で生きているということ。
3　人間が認識しているものの見方が必ずしも「事実の世界」とは言えない以上、哲学の考え方や探究する姿勢を尊重しないと、人生をよりよく生きられないということ。
4　人間の認識の仕方は限定的でしかなく、生物にとって「事実の世界」がどのように認識されているのかを分析しないと、世界への認識や理解も深まらないということ。

□

(ク)　本文について説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　人間にとって普遍的な価値である〝真〟〝善〟〝美〟を探究するために、自然科学とソクラテス哲学がそれぞれ深まってきた過程を、学術的な専門用語を用いて具体例を挙げながら論じている。

2　歴史上の人物の業績をふまえ、世界の謎を解明するために発展してきた自然科学と、人間の内面に対する疑問で深まった哲学の両者が常に影響し合いながら進歩してきたことについて論じている。

3　自然哲学が、「事実の世界」を解明する自然科学と「意味の世界」を問うソクラテス哲学に進化した過程を述べ、認識の仕方という視点をふまえて「意味」と「事実」の関係について論じている。

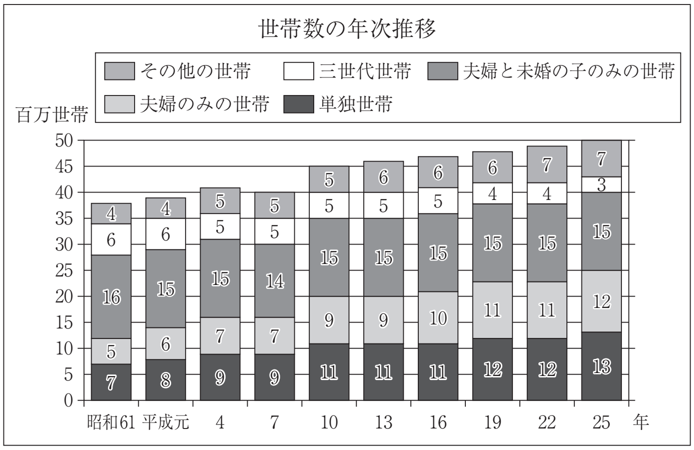
4　人間の美に対するあこがれや真実を探究する心が、自然科学やソクラテス哲学として進化する原動力となったことを、自分の興味を広げて世界を観察することの重要性に触れながら論じている。

□

五

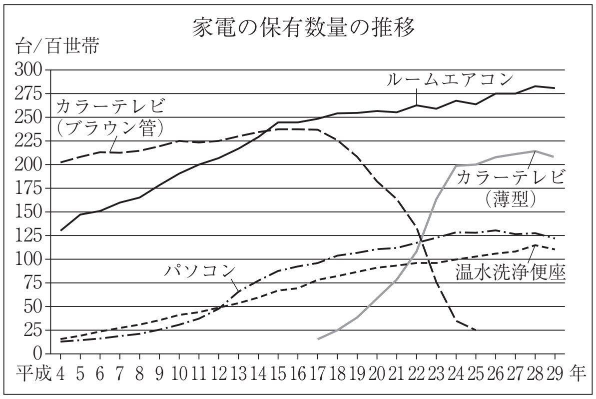
中学生のAさん、Bさん、Cさん、Dさんの四人のグループは、「総合的な学習の時間」に家庭の電力消費量の現状と課題について調べ、話し合いをしている。次のグラフ1、グラフ2、表と文章は、そのときのものである。これらについてあとの問いに答えなさい。

グラフ1



厚生労働省「平成28年国民生活基礎調査の概況」より作成。

グラフ2



内閣府「消費動向調査」より作成。「カラーテレビ（薄型）」は平成17年から調査対象となり，「カラーテレビ（ブラウン管）」は，平成25年で調査が終了している。

表

家電の種類と普及率

	現在の普及率		昭和61年の普及率
電気洗濯機	99.0%	（平成16年）	99.6%
電気冷蔵庫	98.4%	（平成16年）	98.4%
電気掃除機	98.1%	（平成16年）	98.2%
電子レンジ	96.5%	（平成16年）	45.3%
ルームエアコン	91.1%	（平成29年）	54.6%
温水洗浄便座	79.1%	（平成29年）	調査対象外
パソコン	76.7%	（平成29年）	調査対象外
空気清浄機	42.6%	（平成29年）	調査対象外
カラーテレビ（薄型）	96.7%	（平成29年）	調査対象外
衣類乾燥機	56.3%	（平成29年）	9.7%
食器洗い機	32.4%	（平成29年）	調査対象外

内閣府「消費動向調査」より作成。「現在の普及率」のうち，「電気洗濯機」「電気冷蔵庫」「電気掃除機」「電子レンジ」は，平成16年に調査が終了している。

Aさん　本日は、家庭の電力消費量の現状と課題について考えてみましょう。一世帯あたりの電力消費量に着目して考えると、「原子力・エネルギー図面集二〇一六」によれば、昭和六十年からの二十五年間で約一・五倍に増えています。

Bさん　なぜ、今の生活は、それほど大量の電力を消費するようになったのでしょうか。

Cさん　それを考えるために、まず、グラフ1を見てみましょう。昭和六十一年から平成二十五年までの推移を比較すると、［　　　　］ことがわかります。

Dさん　つまり、電気洗濯機や電気冷蔵庫などが世帯ごとに使われていることを考えると、世帯数が増えればそれだけ全体の電力消費量も増えるということなのですね。

Aさん　では、家電の使用について、一世帯あたりで見てみると、どのような点が電力の消費量に影響しているのでしょうか。

Cさん　表を見てください。どれも今の私たちにはなじみのある家電と言っていいと思いますが、その普及率において、表の中の家電は、昭和六十一年の時点ですでに普及しているものを除き、いずれも大幅な数値の変化が見られます。特に「温水洗浄便座」や「パソコン」など五種類の家電が、昭和六十一年の時点で調査対象外でした。これらの家電が調査対象になったということは、各世帯にある家電の種類に変化があったということです。

Dさん　この変化は、家庭で使う電力の消費量に影響がありそうですね。

Bさん　少し疑問に思ったことがあるのですが、たとえば、電気冷蔵庫やルームエアコンなどは、昔と比べて現在のほうが省エネ化が進み、消費電力は減っているのではないでしょうか。

Aさん　たしかにそうですね。それにもかかわらず、一世帯あたりの電力消費量が増えたのはなぜでしょうか。

Cさん　グラフ2からも、電力消費量の増加の理由を、読み取ることができると思います。グラフ2で示された百世帯あたりの家電の保有数量の推移から、一世帯あたりの同じ家電の保有数量がどのように変わってきたかを考えることができます。

Dさん　これまでの話を総合すると、表とグラフ2から読み取った変化の内容から、家庭の電力消費量が増加している理由は、［　　　　］からだと考えられます。

Cさん　こうしてみると、各家庭で電力を無駄に消費しないようにすることが課題と言えますね。

Aさん　それを実践するために、何か私たちにできることはありますか。

Bさん　基本的なことですが、こまめに電源のスイッチを切るという意識を高めなければなりません。

Dさん　温水洗浄便座のヒーターは、ふたを閉めると節電になりますから、上手に使うということも大事です。

Aさん　ここまで、家庭の電力消費量の現状と課題について話してきましたが、電力を無駄に消費しないようにするために、まずは自分にできることから節電を意識するようにしましょう。

(ア)　本文中の□に入れるものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　夫婦のみの世帯、夫婦と未婚の子のみの世帯に大きな変化はなく、主に単独世帯が約二倍に増加していることに伴って、全体の世帯数は増えている

2　三世代世帯が半分に減少しているものの、主に単独世帯や夫婦のみの世帯が増加していることに伴って、全体の世帯数は増えている

3　夫婦のみの世帯が約二倍、その他の世帯が約三倍に増加したことに伴って、三世代世帯が減少しても、全体の世帯数は増えている

4　どの年も夫婦と未婚の子のみの世帯がすべての世帯のなかで一番多く、全体の世帯数は約五割増えている

(イ)　本文中の［　　］に適する「Dさん」のことばを、次の①〜④の条件を満たした**一文**で書きなさい。

①　書き出しの［家庭の電力消費量が増加している理由は、］という語句に続けて書き、文末の［からだと考えられます。］という語句につながるように書くこと。

②　書き出しと文末の語句の間の文字数が**二十字以上三十字以内**となるように書くこと。

③　表とグラフ2から読み取った変化の具体的な内容に触れていること。

④　「一世帯あたり」という語句を、そのまま用いること。

家庭の電力消費量が増加している理由は、［　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　］からだと考えられます。

二〇一八年度　神奈川県公立高校入試問題

一

解答

(ア) 1、きろ　2、くちゅう　3、ゆうし　4、か(られる)　(イ) a、2　b、1　c、3　d、4　(ウ) 1　(エ) 3

解説

(イ) a、「洋裁」と表記する。1は「才」、3は「菜」、4は「採」。b、「背筋」と表記する。2は「勤」、3は「均」、4は「禁」。c、「将来」と表記する。1は「障」、2は「招」、4は「焼」。d、「拝む」と表記する。1は「令」、2は「俳」、3は「礼」。

(ウ) 例文は「自然と～する」という意味。2は他者から何かをされるという受身の意。3は「～ができる」という可能の意。4は「～なさる」という尊敬の意。

(エ) 「…のうしろ」という同じ言葉が三回繰り返されており、それによって詩情が生み出されている。また夏の終わりや夕日が沈んでいくときに感じる寂しさや切なさ、悲しみといった心情が詠まれていることをつかみ、その向こうにきっと天使が存在するのだろうと思いをはせていることをおさえる。

二

解答

(ア) 3　(イ) 4　(ウ) 1　(エ) 2

解説

(ア) 「思っていることをそのまま言うことができなかった」という意味であることをおさえる。また直前に「みな入道の心をおそれて」とあるので、新京をつくった清盛の怒りを買うのを恐れて、「古京と新京といづれか勝れる」という問いに正直に答えられなかったということ。

(イ) 「この京をそしりて…さんざんに言ひけり」「もとの京のよきやうを言ひて」とあるのに注目する。「長方」は、どちらの京が優れて

いるか、という入道の問いに対して、遠慮なく自分の意見をぶつけている。

(ウ)「入道の心にかなはんとてこそさは言ひしか」とあるので、むしろ入道の意にかなうようにそう言ったということ。入道が新しい京に後悔する気持ちが出てきているのを見抜いたのだと述べている。

(エ) 2は最終段落の内容と合致している。1は「『長方』に遠慮して」が、3は「知識が豊富」が、4は「『入道』を怒らせた」がそれぞれ不適切。

口語訳

六波羅の太政入道（平清盛）が福原京をたてて、皆が移った後、思いのほか時間がたってから、「前の都と今の都とではどちらが勝っているか議論をしよう」と言って、前の都に残っていたそれなりの身分の人々を皆呼び集めたが、人は皆入道の怒りを買うのを恐れて、自分の考えをありのままに打ち明けなかった。長方卿ただ一人が少しも遠慮しないで、今の福原京をけなして、言葉も惜しまずさんざんに言った。そして、もとの京のよい所を言って、ついにはその日のうちに、あの人の決断によって元の京へと帰ることに決まってしまった。

後にその座にいた上位の貴族たちが、長方卿に会って「それにしても驚きあきれたことだなあ。あれほどの非情な人が、素晴らしいと思ってつくった京を、あれほどにどうしておっしゃったのか。説得して元の京に戻ることが決まったからよいものの、どうしようもなく立腹したならば、どうなさったのか。」と言ったところ、「このこと、私の考えとは違うのです。入道の意にかなおうと思ってそのように言ったのです。その理由は、広く中国や日本の例を探ってみますと、よくない新しいことを行った者は、はじめに思い立った時は、むしろ人に相談することはありません。その行いを少し悔やむ心がある時に、人に問うのです。この件もあの福原京が、ことのほかに落ち着いた後、二つの京について議論を行ったので、早くもこのことを悔やむようになってしまったのだ、ということを知ったのです。そうであれば、どうして言葉を惜しむ必要があるでしょうか、いやありません。」と言われた。

実際に、後に（長方卿が）他人に地位を追いこされそうになったときも、この入道が良いように言って、「長方卿は、ことのほかものを理解している人である。簡単に他の人に追いこさせてはならない。」と、後までも味方をなさったということだ。

三

解答

(ア) 4　(イ) 3　(ウ) 2　(エ) 1　(オ) 1　(カ) 4

解説

(ア)「何度も手紙を読みたいと思い…そこには英が求めていたような言葉はなかった」「あの手紙…を読んだときに感じた失望にこだわっていた」に注目。洋装に文句をつけてはいても、不機嫌である本当の理由は幸次郎からの手紙であることをおさえる。

(イ) 直前の「自分だって…変化はなくても真面目に日々を送って来たのに、という反論があった」や、あとの「そのとき胸から沸き起こって来た感情を…飲み込んで」に着目する。心の中に反論ややりきれない思いが込み上げてくるのを抑えようとしている。

(ウ)「細いのに…途切れることなく繋がっていた」「他を寄せ付けない強さ」という表現から、控えめだが確固とした自分自身を持っている人物として描かれている。また、「この製糸場を造るのにどれだけの方が骨を折られたか」「故郷に残った人たちが…心配して下さっているか」と周りの人たちに思いをはせることのできる人物である。

(エ)「仕事をする中で…自分が偉くなったような気がしてしまいます」という勇の言葉を聞いて、英は「顔が赤くなって…冷たくなるのを感じ」る程に強く動揺している。幸次郎に向けた「わたしは富岡で…仕事をしているのです」「なのに、幸次郎は前と同じ」などの自分の言葉を思い出し、「自分は傲慢だった」と後悔している心情をおさえる。

(オ) aでは、「あの手紙…を読んだときに感じた失望にこだわっていた」英の心情が表現されている。またbでは、直前に「幸次郎は…膨らみ続けていた気持ちが、あっという間にしぼむ」とあることからも、英の思いが幸次郎に伝わったことによって、幸次郎の心情にも陰ができていく様子を表している。

(カ) 仕事を覚えた誇らしさから傲慢になり、幸次郎を「変わっていない」と責めてしまったが、勇の話を聞いて自分の言動を悔やんでいる。そして、「お変わりなく。」という短い手紙に込められた幸次郎の想いに気づく、という英の心情の変化が描かれている。

四

解答

(ア) 4　(イ) 2　(ウ) 4　(エ) 2　(オ) 3　(カ) Ⅰ、客観的に存在　Ⅱ、意味あるもの　(キ) 1　(ク) 3

解説

(ア) Aは、前の「それは、自然哲学が問うているような…についてじゃない」に続けて、「…である！」と、より適切なことを強調している。Bは、前に述べた内容の具体例として、「天体法則」をあげている。

(イ) 「自然哲学者たちは…もっぱら〝考える〟ことに頼って世界の謎に取り組んだ」「自然哲学は…科学に取って代わられた」とあることをおさえる。

(ウ) 「それと同じような出来事だったのだ」とあるので、「それ」が指すものを前の文脈から探す。赤ちゃんの頃は〝外〟の世界に興味津々だが、やがて自分自身に目を向け、考えるようになるという例で、「〝外〟から〝内〟へと目を向けること」について述べている。

(エ) 前の「ソクラテスが生きたのと同じ紀元前五世紀頃…異なる文明に現れた」という内容を言いかえていることをおさえる。

(オ) 「豊かな『意味の世界』」とは、前の「〝ほんとう〟のことってなんだろう?」「人生いかに生くべきか?」などの「哲学が解き明かすべき問い」のこと。「同時に生きている」とあるので、人間はそういった哲学が対象とする世界と科学が対象とする世界のどちらにも意味を見出して生きているということを述べている。

(カ) 「〝事実〟こそが先にあるのであって、〝意味〟は…あとからくっつけたもの」と「まるっきり逆」であることに着目する。天体法則を例にあげ、人類が「〝意味〟を見出し」たものだけが、「〝事実〟として認識される」のだと説明していることをふまえて探す。

(キ) 「それはつまり」と前の内容を言いかえた部分であることをおさえる。カラスを例にあげ、「事実の世界」が人間とは異なっていることを述べている。

(ク) 「哲学もまた…近代の科学を生み出すことになったのだ」「でもその一方で、哲学は…別の方向にも自らを進化させてきた」とあるように、自然哲学が自然科学とソクラテス哲学という別の方向の学問を生み出したことを述べたあと、人間が「科学が対象とする『事実の世界』だけじゃなく、豊かな『意味の世界』もまた同時に生きている」ということについて論じている。

五

解答

(ア) 2　(イ)（家庭の電力消費量が増加している理由は、）一世帯あたりの家電の種類と同じ家電の保有数量が増えた（からだと考えられます。）（26字）（同意可）

解説

(ア)「なぜ、今の生活は、それほど大量の電力を消費するようになったのでしょうか」という問いの答えとして適切な内容を選ぶ。全体の世帯数が増えていること、またその主な要因が「夫婦のみの世帯」と「単独世帯」の増加であることをおさえる。4のように、どの年にも共通していえることを読み取っているものは、変化の原因としては不適切。

(イ)「温水洗浄便座」や「パソコン」などの新たな家電が調査対象になっていることから、家電の種類が増えているとわかる。また、本文中のCさんの言葉にも「グラフ2で示された百世帯あたりの家電の保有数量の推移から…考えることができます」とあるので、家庭ごとの同じ家電の保有数量も増えているとわかる。これらを電力消費量増加の要因としてまとめる。